

所属	国際交流研究科 国際交流専攻 修士課程	修了年度	平成 28 年度
氏名	吾妻 隆雄	指導教員	上田 昇

論文題目	十字と人類—十字架を中心として
------	-----------------

本文概要

現代において十字架や十字マークが、いろいろな処で使用されている。教会の屋根には必ず十字があり又、赤十字・白十字・ミドリ十字など身近な一つの記号や印として使用されている。十字はいつ頃どこで使用され始めたのか、本研究のテーマは、大きく十字について4つのことを考察し、最後に現代の十字と十字の未来について論じる。

第1章では「古代の十字」と題し、世界の何処でいつ頃十字マークが使われていたのかを考察し、例としてトルコのアンカラ出土の円盤型竿灯飾りに見られる十字(紀元前2300年頃)、エジプトのピラミッド内の壁画に描かれたアンク十字(紀元前1400年前後)、モンゴルのノイン・ウラの墳墓より出土しエルミタージュ美術館に保管されている絨毯に染められた十字マーク(紀元前後)、などを取り上げる。アンカラの円盤型竿灯飾りは、当時の人々が何に使い、利用したのかは、はっきりしないが芸術的作品と言える。また、ピラミッドの壁画のアンク十字(輪頭十字)が語るのは「生命」・「宇宙」である。ノイン・ウラの絨毯は中央に渦巻模様が3段に描かれ、それを十字マークの刺繍で囲ってラクダの毛や中国の綿によって縁どりした作品であり当時の身分の高い人たちが使用していたに違いない。

第2章では古代ローマにおける処刑方法としての十字架を取り上げる。十字架が古代ローマにおいて、処刑の道具として使われた。当時処刑には、絞首刑、梟首刑、鋸挽き刑、十字架刑などがあつた。十字架刑については、最初は一本柱に張り付けられた処刑であつたが、見せしめのため十字にして処刑を行ったと考える。そして、処刑により死体の変形を防止するため六端十字や八端十字に変化していったと考える。

第3章ではキリストの十字架がキリスト教の象徴になったのはなぜかを明らかにしたい。当初キリスト教徒は死者を異邦人の墓地に埋葬していたが次第に一か所に埋葬するようになり、共同のカタコンベを創るようになった。その後、その上に自分たちの住宅兼教会を作り、その屋根に十字架を立てるようになり、キリストの象徴が教会の象徴であり十字架が表に出るようになったと考える。そして、当時の権力者であるコンスタンティヌス(AD274頃～337頃)が天空にキリストが現れる夢を見て✠マーク「トロパイオン十字」のヘルメットや軍旗を作り戦いに臨んだのであつた。

戦いに勝利したコンスタンティヌスはキリスト教を国教として認め自分自身もクリスチャンになり、洗礼を受けたのである。その後十字架はキリストの象徴として、使用されるようになった。

第4章では十字が美術・建築作品にどのような影響を与えたのかを述べる。そして、国旗にも十字が描かれているものがある。国旗と十字の関係についても触れる。

第5章では現代の十字がどのように使用されそれが今後どのように影響を及ぼしていくのかを考察する。

結び。世界人類が生き続ける限り、この十字、十字マークも生き続けると確信する次第である。そして、今後の十字のあるべき姿として、キリスト教が背景に存在している事を再認識するとともに、キリスト教以前からすでに用いられていた「宇宙」「生命」という雄大かつ、壮大なイメージと重ね合わせることで、さらなる高次元でのモチーフとして使用されて行くことが望まれると考える。